

## CHOSHI (第7話)

藤本は中学1年生の秋から銚子四中のエースになった。2年の春の市内大会は準優勝。2年の秋は東総大会に出場した。県選抜大会では銚子三中と対戦した。

試合は7回まで0対0。延長に入った8回に2アウト3塁のピンチを迎えた。藤本にとってはバッターを抑えればよい2アウト3塁は大したピンチではなかった。しかし、3塁ランナーが、藤本が投げる直前に大きなリードをとった。

『刺せる。』藤本は3塁に牽制球を投げた。

『ボーク！』3塁の審判が大きな声で『ボーク』の宣告をした。ボークとは不正投球を意味するが、3塁に牽制球を投げただけでは、ボークにはならない。牽制球を投げる時に踏み出す左足がきちんと3塁を向いていれば問題は無いのだが、3塁塁審は左足がホームの方を向いており、3塁ランナーをだますような牽制に見えたということなんだろう。バッターを抑える自信のある藤本が相手をだますような牽制を投げる理由は無いのだが、このボークによって、銚子四中はサヨナラ負けになった。

藤本はボークには納得いかなかったが、次からは力で相手を圧倒するようなピッチングをしようと思った。そしていよいよ3年の春の大会を迎えた。

銚子四中は順調に勝ち進み、準決勝は再び銚子三中だった。同じ日に銚子一中と銚子二中の準決勝もあり、勝ったチームの決勝戦はその日のうちに行う日程だった。

銚子市野球場は超満員になった。漁師の家が多い、銚子一・二・三中の親たちは大漁旗を振って応援した。

藤本はこの大観衆の前で、最高のピッチングをした。藤本の球はさらに速くなり、力で銚子三中のバッターを圧倒した。一方、銚子三中もしっかり守った。ピンチでは4番の中居との勝負を避け、四中の打線を分断した。試合は7回が終わっても0-0だった。8回、9回、10回、11回、12回……、お互いに一步も譲らない。藤本は点がとられる気はしなかったが、心配があった。

この試合の後、休憩なしで銚子一中との決勝戦がある。疲労が残った状態で、関根、藤原、芝野、小知和らの強力打線を抑えることができるのだろうか？藤本の心配をよそに、0は続いた。13回、14回、15回、16回、17回、18回そして19回。ついに銚子四中は相手のミスからチャンスを広げ、1点を取った。そして藤本が締め、延長19回の死闘を制した。

『30分後に決勝戦を行います。』日没が迫る中、藤本の疲労などお構いなしに、次の試合の開始時刻がアナウンスされた。